
保育園(夜兎バージョン)

河野夜兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

保育園（夜兎バージョン）

【Nコード】

N3922L

【作者名】

河野夜兎

【あらすじ】

保育園で働く人のお話です。※ごはんライス先生執筆の同タイトル「ライスバージョン保育園」と読み比べてみて下さい。男女の考え方の違いがわかるかも。

保育士という仕事は、本当に体力勝負だ。

元気な子供達と一緒にリズム体操をしたり、園庭を駆け回り遊んだり歌ったり、絵本を読んだり、一日中息をつく暇がない。

けど、うちの保育園にはたったひとりだけど、男性保育士がいるから正直色々と助かっている。

「ライスせんせーっ！！サッカーしよー」

「えーっ！！鬼ごっこがいいよー！！せんせー、鬼ごっこおーっ！！」

「おままごとよっ！！ライスせんせーっ！！せんせーはお父さん、わたしがおかあさんねっ！！」

園庭遊びになるとライス先生はこんな感じで子供達の引っ張りだこになる。

そんなパワフルな子供達にちよっただけ苦笑いをしながらも子供達と和気あいあいと遊ぶライス先生は、実は五年前に私と同期でこの保育園に赴任してきた。

この五年で私達は幼児保育の大切さと厳しさを嫌というほど実感した。

子供は人類の宝物だなとつくづく思う反面、やっぱり一日中子供に接していると、その扱い方はとても難しくて大変だと感じてしまう。

それは、きっと私達がシングルであるということも少なからず関係してるのかな？とも思い、時々苦笑する。

今日も外遊びの最中に小さな事件が起きた。

「うわあああああゝん！いたいよおおゝっ！！」

園庭に響く子供の泣き声に私は慌てて視線をやると同時に走り出す。

そこには、口を尖らせて不機嫌そうな顔をしたとおる君と、地べたに座りこんで手のひらを押さえて泣き声をあげるこうじ君がいた。

「どうしたの？」

私は泣いているこうじ君の頭を撫でて話を聞く。

「とおるくんがあゝっ！！とおるくんがあゝ、ぼくの、おだんごおゝ、うわあああああゝん！！！！」

こうじ君の目の前にはぺしゃりと踏みつけられた土のだんごらしきものがあつた。

「こわしたああゝっ！！ぼくのおだんごおゝっ、それで、手をふんずけたああゝ！いたいよおおゝっ！！」

手の甲には小さな擦り傷ができて、じんわりと血が滲んでいた。

「よしよし、ちょっとバイ菌入るといけないから、消毒して、絆創膏張ろうね」 私はこうじ君を抱えて立たせて、お尻の砂を払い職員室へ連れていく。

「大丈夫だから、ね」

手のひら傷を消毒して、絆創膏を張るが、こうじ君は全然泣きやまない。きつと、大切なお団子を壊されたことが悔しくて悲しいのだろう。

私は、こうじ君を抱っこして、赤子をあやすように背中をとんとんとしながら、

「こうじ君、また、すごいお団子作ろう。今度は先生にも作り方教えてくれるかなあ？ぴかぴかのお団子作るのすごい上手だもんね♪」私の言葉に、こうじ君はうん、うんと小さく頷いた。でも、私から中々離れようとしなない。

無理もないね。まだ年中の5歳。まだまだお母さんに甘えたい盛りだろう。両親は美容師さんで、二人でお店を経営しているから忙しくて、こうじ君は毎日七時まで延長保育。

朝も早朝保育で少し登園が早いから、実質両親というよりも、園で生活のほうが長いのできつと寂しいのだろう……。

事務所の中から園庭を見つめる。ライス先生がおる君の前にしゃがみ、何かを話している。(二人のお母さんに説明しなきゃいけないから、後でライス先生に話を聞こう)「さ、お団子、作りにいこうか?」

こうじ君に小さく笑いかけた。

お昼寝の時間に30分程だけど私達は少しだけ子供達から解放される。

その間にトイレ掃除や教室の掃除などの雑務をこなしながら、私はライス先生とおる君のことを尋ねた。

「ライス先生、とおる君——」

「夜兎先生、とおるだけが悪いわけじゃないですよ」

「え……?」

「こうじがね、先におるに悪口言って砂かけたんだって」

「悪口言ったって、何をですか?」

私はライス先生をじつと見つめた。

「こうじがね、とおるがお父さんがいないことを笑ったんだよ。だから、団子壊して手をふんずけたんだってさ」

ライス先生はやりきれない顔で苦笑した。

「……結局子供を汚してくのは、近くにいる大人なんだね……」

私は俯いてぽつりとつぶやいた。

「だって、とおる君にお父さんがいないのを知っているのは大人でしょ?」

……きつと、そういう話を近くの大人がしてるから：」

幼い頃のコンプレックスは、大人になっても些細な事で胸を引っ搔く。私はその痛さを知っているから、幼いとおる君の気持ちを考えると余計に辛くなった。

「そんな顔しちゃダメだって。とおるにはさ、よくやったって俺が褒めといたから」

ライス先生はいひひっと子供みたいに笑って私の頭を叩いた。

「あと、悪口言われたらもっとやれってアドバイスしといた」

「はああ？ ちょ、ちょつとおっ！！ダメじゃないですか！ 暴力的な事は！！！」

私はライス先生を見上げてたしなめるけど、

「あのね、夜兎先生、悪口だって立派な暴力だぜ。言われたまんまで黙って耐えることが正しいことだと思うか？」

「そ、それは：」

口籠もる私に、

「大人が子供を汚すならさ、汚れに免疫つけてやるのもまた大人じゃね？」

ライス先生は笑う。

「世の中、除菌除菌てうるせーけどさ、それじゃいかんと思うんだ。バイ菌に抵抗する力がどんどん減って、身体が弱るばっかだと思うんだよ。人間の気持ちってのも一緒だと思うんだよな」

なんだか、目から鱗が落ちた気分だった。

「近くにいる大人が子供にバイ菌つけるなら、また、近くにいる俺達みたいな大人がちょっとでも強くなれる免疫をつけてやればいい。少々わんぱくだろうが、笑って生きてける基礎を持てるなら、俺は保護者に文句言われても万々歳ぜよ」

「ぜよ：って、なんで急に坂本竜馬なんですか？」

思わず私は吹き出してしまった。

「でも、うん。確かにそうかもしれない。気持ちが強くなる免疫かあ…。私には考えつかないことだなあ…」

頷きうなる私に、

「全く、真面目で堅過ぎるんだよ、夜兎先生は。俺に喜んでおっぱい揉ませるくらいの寛大さは必要ぜよ」

わははっと笑う。

「むむう…、いいですよ。揉みたきゃどうぞ！」

私はわざと胸を張ってライス先生を見つめた。

「な、なんかあっさりいいよって言われるとなんかリアクションに困るんすけど…」

「なに、照れてんですか？」

私はこらえきれずに吹き出した。

「むっ、からかってんならマジで揉みますよ」

あ、目がちよっとマジになってる。

「ど、どうぞ…べ、別に胸触らせるくらいなら全っ然平気だし」

それでも挑発をやめない私に、

「んじゃあ、遠慮なく」 そう手を伸ばすと、

「せんせー、おしっこおっ」

「ぴいちゃん!!」

私はあわてて、ぴいちゃんをトイレに連れて行った。振り返ったら、ライス先生は壁に頭をついて小さくうなだれてた。

(本当に、面白い先生だなあ…)

私はくすっと笑って、よし、頑張ろうと思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n39221/>

保育園(夜兎バージョン)

2010年10月8日13時56分発行